

大社詣での道

(一)

澁谷太郎

そとものみち

山陰地方は所謂中國山脈の北、畿内の西に續く古來から我が國の八道の一つである即ち山陰道の地を指すのである。これを古訓では……そものみち……と呼んでゐたそうである。地理的には北は日本海に面して、南は中國山脈を隔て、山陽道に接し、丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐の八つの國に分れて、神代の昔素戔嗚尊、大國主命が心血を注いで經營なされた地であつて、古代歴史上最も重要な地位を占むるところであると共に所謂出雲民俗の發祥の地である。この出雲民俗とは古書によると、大國主命及びその父神素戔嗚尊を祖神として古代出雲地方を中心として發展した民俗であることを書いてあるが、其後天孫民俗との融和が出来て、出雲民俗は次第々々に大和朝廷に同化融合して、大和朝廷の御奴として土地や人民を支配するやうになつたことは他の國造と同様であつた。その後崇神天皇の御代に日本歴史で名高きあの四道將軍が置かれるやうになつて、その一人である丹波

道主命が勅命を奉じて鎮撫せられた當時は、その國土經營も未だ強大な出雲の勢力に押されて、因幡以西の地までは及ばなかつたやうである。

山陰の名勝

その後大化改新に際して今の言葉で云へば、即ち統治權は完全に大和朝廷に還つて、大國主命の後裔は單に祭神の家となつて、のち千家、北島の兩家に分れたのである。即ち往年東京府知事をしてゐた千家尊福男は千家の直流である。のち明治の初年になつてあの廢藩置縣後の幾多變遷を觀て、只今では京都、兵庫、鳥取、島根の一府三縣に分治されてゐることは現在人の克く知るところである。そうして日本海に面する山陰の海岸地方には、日本三景の一として古くから知られ、また謳はれてゐる自然の景勝地天の橋立を始め、島根の北浦及び香住海岸から但馬御火浦一帯にかけての海岸美は所謂京都から大社詣での道に副ふて海岸美が十二分に展開される。一方ではまた自然の景觀として秀麗無比な山岳的

大風景を描き出して、大山國立公園がある。これ等の海岸や山峽、河畔等には至るところに温泉が湧出して保健旅行の好適地を提供してゐる。亦歴史的には元弘の昔南朝の忠臣名和長年が船上山頂に義旗を懸して王事に竭した史的事實は我が國史上に貴い一頁を飾つてゐる。兎に角大國主命が出雲の地に最古の都を築かれて以來皇纒幾千年……神話と傳説に彩られ古代史を飾るこの一そものみち……山陰道地方は國民精神の作興と祖國認識の旅行には最も相應はしいところであると思はれるのである。

大社詣て

そこで僕は出雲大社詣てを出ひ立ちて、此盛夏八月中旬の某日、大阪驛を午前七時五十分發の大社行急行列車に飛び乗つて炎暑の際として、途中三十七のトンネルを通るのに車窓をしめたり開けたりしながら大社に向つたのであつた。大社驛についたのは午後四時一寸過ぎて居つたが、兎も角驛前のバスに乗つて大社參拜の大道を眞すぐに走つて大社に參拜したのである。後方に八雲山、左に鶴山、右に龜山の丘陵を負ひ、森嚴自から淨域をなしてゐる神殿の前にぬかづきて無我の境で拜すれば、心底に何等か云ふべからざる快念と莊嚴と覺へて自然に崇敬の念が心の奥底から湧き出たのであつた。こゝに序でに大社の由來を略記することにする。

大社の由來

大社は祭神は國土經營の神……大國主命で、御名を八千矛神、

大己貴命、大物主命、大國魂命といろ／＼に申上げてゐたやうで、また民間では大黒様とも稱して福の神、縁結びの神様として一般に崇敬せられてゐることは人の克く知るところである。本社のお鎮座は神代の昔、須佐之男命、大國主命に勅して……我之女須世理毘賣を嫡妻となし宇迦山の山本に底津石根に宮柱を太く高天原に冰椽高くして居れ……と宣られ給へるに起つたのであると神官はいろ／＼僕に聞かせてくれた。そうして、高皇產靈尊が諸神に命じて高社の社殿を造つて其功に報いられ、天穗日命をして、その祭事を司らしめたのが本社^の起源であるとのことである。そうして延喜の御代に本社を宮殿のやうに改造し給ふて、その後齊明天皇の五年に出雲國造に命じて宮殿を修理せしめて、初めて神代の制を改めて高さ七丈以上の正殿式に定められたのである。垂仁天皇の二十六年には皇子牟智和氣命がこの社に禮拜して靈驗を得給ふたと云はれてゐるが、元弘三年の三月建武中興の英主、後醍醐天皇は畏くも皇道再興の祈願のため御祈願ある等、古來皇室との御關係は特に深いのである。御社殿は永久三年十月の遷宮以來六十年目毎に式事造營せらるゝの制を樹てられたが、その後幾多の變遷があつて、現在の御本殿は延享元年十月の建立と云はれて、現在^は國寶になつてゐる。

全國で神無月は出雲では神有月

神苑は周圍に荒垣を繞らして南面するのが正門であるが、この正門を入つた所にある銅鳥居は寛文六年大江綱廣氏の寄進にかゝるそうであるが、その正面の巨大な建物は拜殿で、永正十六年日子經久の建立したものである。本殿の構造様式は所謂大社造と稱せられる我國最古の建築様式で、神社の典型を示し、この種の建築中我國第一の大社である。即ち裏入にして階段及入口扉は一方に偏在して、神坐は古方奥にあつて御神體の位置が普通神社と相違して、竊には千木、纏木を置いた簡素雄健なものであるやうに拜觀した。境内には尙文庫寶物殿寶庫鎖火殿其の他攝社、來社が多いが、本殿の後方左右に文庫と寶物殿とがあつて、寶物殿には大社傳來の寶物を陳列して一般の拜覽に供されてゐる。こゝに面白くことは吾々子供の時から克く兩親達に、十月は神無月と云つて諸國の神々が出雲の大社に招待されて赴いて行るから神無月といふのである。大社では多勢の神々が集つて毎日會議を開いて相談をしてゐると度々聞かされたが、克く大社で氣を付けて見ると、

丹羽氏行先生を憶ふ

社殿の周圍に小さな祠で主のない社が數々ある。聞いて見ると、これが即ち出雲では反對に神有月と稱して全國の神々が命の神徳によつて大社に集ると云ふ俗信に基いて建てられたもので、日本國中の神々が集める御旅所になるものであるとのことであつた。僕は參拜の歸途正門の右側にある一茶亭に立寄つて、田舎料理の夕喰を一人でやりつゝ、老婆といつて話をしたが、老婆は。且那さんホントウに十月には全國の神様が、こゝに集つて來て毎日／＼酒を飲たり踊たりしてゐますよ、眞夜中に大社の後ろの方にソウト見に行つた人があつたが、其の人の話などは何等か茶碗やお膳の音がして居たとのことでありましたよ然しその人は罰が當つたか間もなく亡くなりましたよ。と老婆は大眞面目に語つて、神有月には大社様も全國から集まる神様のお客でさど御多忙のことだらうと云つてゐた、出雲の人々は全くかやうに十月には神様が神社に招待されて來ると心底から信じてゐるのである。

田 中 好